"The Englishman in Italy" と時代背景

The Significance of The Sirocco in Robert Browning's "The Englishman in Italy"

大 呂 義 雄
Yoshio Oro

Robert Browning's poem "The Englishman in Italy" was first called "England in Italy. Autumn at Sorrento" in the manuscript form. Before he published it, he changed the subtitle to "*Piano di Sorrento.*" When in 1849 it was finally grouped and published in the volume *Dramatic Romances and Lyrics*, the title was changed to the present one "The Englishman in Italy. *Piano di Sorrento.*" The alteration of this title is one of the important clues to the meaning of this poem. It would seem that he intended the poem to be as a lyrical, travel poem. However, by renaming the subtitle and then the main title, he shifted the emphasis from season to place; from country to man; from lyrical poem to dramatic poem.

When Browning sent it to Elizabeth Barrett in an unfinished condition, the last section of the poem had not been written. This section was probably added to the poem on her advice or suggestion. In *A Browning Handbook* Professor DeVane quotes what Elizabeth Barrett said to Browning as follows: "The end you have put to 'England in Italy' gives unity to the whole. . . just what the poem wanted." This section is one of the few places in which he frankly embodied his opinions on politics, and his feeling against Corn Laws in particular.

In this poem Browning shows us many experiences of his journey to Italy. These are related in such descriptions as the rattling down of the quail-net; girls' fetching of the drying figs under housetops, etc. It seems that these and other details of the poem are given from his own personal observation. He praises the exotic features of Italy which are not found in his native country. The sirocco, the well-known, hot storm, is loosed on people working "In the vat, halfway up in our house-side,/ Like blood the juice spins,/ While your brother all bare-legged is dancing/ Till breathless he grins,/ . . ." (ll. 73-76.)

When Browning visited Italy in 1844, the country was suppressed under Austrian tyranny, while in his native country the abolition of the Corn Laws was being hotly debated in Parliament. On one hand, the political sirocco was raging above the heads of the assiduous, Italian country-folk, and on the other hand the economic, social sirocco was blackening the English sky, which he depicted in the last section he later added to the poem.

Before Browning had visited Italy, he had still to obtain fame in his literary apprenticeship as a dramatic poet. His travel to Italy was an exodus from his mental, or spiritual sirocco; in other words, a pilgrimage to his muse. Therefore, this "sirocco" involves three different meanings: political; economic or social; mental or spiritual.

Probably, Browning hoped that this metaphorical storm would pass as surely as the sirocco wind is passing in his poem.

I

Robert Browning の "The Englishman in Italy" という作品が，詩集 *Dramatic Romances* に収められて初めて世間の目に触れたのは1849年11月６日であった。実はこの作品は1845年８月11日頃にまだ未完の状態で未来の妻 Elizabeth Barrett に送っており，更にそれより以前の1844年10月初旬に，二回目のイタリア旅行を行ったことが知られている。この時期になぜ Browning がイタリアに旅をしたかについては，DeVane 教授は，「世界に新鮮味がなく，退屈で，何も資するものがなかったことは，詩人にとってまぎれもない事実であった。」と述べている。詩人の最大の詩集 *Men and Women* に先立って出版された前述の *Dramatic Romances* は1842年の *Dramatic Lyrics* と同様に，世間の人気を得る手段として，24ページで一部２シリングの小冊子として出版されたものである。それまでの作品が殆どすべて失敗作に終り，何とかして世に認められる詩人になりたいと熱望した Browning は1838年に初めてイタリアを訪れた時の強烈な印象が忘れ難く，再びそれを自らの詩想の糧にし，それによって名声を得たいと願ったのであろう。DeVane 教授によると，1844年９月に詩人はナポリに滞在し，ソレントの平野をさすらい，Vico Alvano 山に登り，師と仰ぐ Shelley が "Stanzas in Dejection" を書いた地点から澄んだ地中海を見下し，更にそのナポリからローマに行き，Shelley と Keats の記念碑を見たとのことである。これを，黙して語らぬ彼の詩神ミューズへの巡礼の旅とでも言うことができよう。とにかく，北イタリアからライン河を下って帰国した時には，気分も一新され，心には多くの新しい詩材を得ていたのである。この小論で取り上げる "The Englishman in Italy" という作品がこの詩材の一つであることは疑いのないことであるが，実はこの詩はただ単なる彼の旅行の体験談に終ってはいない。

興味のある事実は，1845年８月に Elizabeth Barrett に未完の状態で見せた時点から，同年10月13日にこの詩が印刷に回された時点までに，この詩の中で最も重要な最終部分が書き加えられたことである。恐らく，これには既に当代一流の女流詩人であった Elizabeth Barrett のサジェスチョンが大いに与って力があったのかも知れない。同年10月22日に初校を読んで，彼女は次のように述べたとのことである。「あなたが書き加えられた最終部分は詩全体に統一を与えております――それはまさにこの詩に必要なものだったのです。」

この詩の最後で Browning は一体何を書き加えたのであろうか。それは当時の最大の社会問題であり，人々の関心事であった「Corn Laws」についである。この小論文ではこれが何故 Elizabeth Barrett が言うところの「統一」をこの詩に与えることになるのか，又この社会問題に対する詩人自身の姿勢はいかなるものかを，考察することにしたいが，それには先ず，この Corn Laws について十分な予備知識を得ておく必要がある。

II

Corn Laws「穀物法」は十四世紀のエドワード三世の頃から数回発令され，農業保護政策としてイギリスに存在していたものであって，元来ロシアのウクライナ地方などでできる安い小麦に対して，狭いイギリスでできる高い小麦を保護しようとする趣旨のものであった。1815年にこれが強化され，再公布された理由は，小麦の価格を高く維持しておくことがイギリスの地主階級や，政治家達の利害に深くかかわっていたからである。しかし，これほど大きくイギリスの経

済に幣害を及ぼしたものはなく，激しく糾弾されることになった。

1792年から1815年にわたって戦われたナポレオン戦争の間，イギリスの農業は好況であった。荒地や効率の悪い共同利用地，共有地などが囲い込まれ，その中で集約農業が営まれ，科学的に新しい品種が開発されたり，実験が行われた結果，穀物の生産は大巾に伸び，大戦中のイギリスを潤していたが，大戦後，穀物の価格が下降すると，生産者は政府に保護を要求したのであった。その結果，多数の地主を擁する議会は穀物法を通過させ，外国の小麦が国内の市場価格１クオーター当たり80シリング以下の時は輸入を禁止させ，これによって自国の穀物市場価格の維持に努めたのである。しかしながら，この穀物法は決してイギリスの経済を救うものではなく，逆にパニックを惹き起した。イギリスの収獲が悪い時には価格は暴騰し，業者が競って外国から輸入すると暴落するという激しい変動を穀物法は招いた。パンの値段が高くなると，貧しい人々は酪農品や肉類，その他すべての農産物が買えなくなる。その影響は賃銀が低い水準で安定している都市労働者にも当然及び，更には戦争からの復員者が農業に従事し過剰気味となってきて，少ない労働力でより高い賃銀を狙う農業労働者にも深刻な問題となってくる。そこで，1818年には小麦価格の安定を図るために「新穀物法」が制定され，手直しが行われた。これは輸入関税の順応率（スライディング・スケール）を決めるやり方で，国内価格の低い時は輸入穀物を全面禁止にするのではなく，関税を引き上げ，国内の価格が上昇すれば徐々に関税を低くするという方法である。このようにすれば関税が下がるにつれて徐々に穀物が入ってくるし，国内の供給は一定の水準に保たれ安定するものと期待されたのである。しかしながら，これとても所詮は画餅にすぎなかった。この計画は穀物業者や投機家を考慮に入れていなかったのである。彼らは関税がこれ以上は低く下がりそうにないと思えるまで輸入穀物を保税倉庫に保管し，国内価格が最高になると市場に放出して利益を得ようとする傾向になってきた。その結果，突然市場に溢れた小麦は即座に価格の暴落を招き，新穀物法も旧穀物法と同様に全く効果のないものとなったのである。

これに対してパンの主な消費者であるブルジョアとプロレタリアの両階級の間に自覚が高まらない筈がない。まず，1836年にロンドンに反穀物法協会が設立され，穀物法撤廃の改革運動が行なわれたが，地主階級をその支持基盤とする時の政府にこれを期待することができず，この運動は成果を見なかった。続いて1838年９月マンチェスター商工会議所が母胎となって反穀物法協会が発足。さらに1839年になると，ランカシャー，ヨークシャーの繊維工業都市であいついで反穀物法協会が設立され，やがてマンチェスターの協会を中心に一つの全国的な「反穀物法同盟」(Anti-Corn-Law League) が結成され，ここに一大国民運動ともいうべき形をとるにいたった。この運動の趣旨は，「地主，資本家，労働者は商人と平等の利益にあずかり，国家の富の創造と流通をはかる。この運動はすべての階級の者に，国家の外国貿易に制限を加えることによって人口の増加を遅滞させ，都市の成長を抑制する独占排除のための協力を訴える。かくして，国家の増加する人口と富とに由来する多種多様な資源を，彼らに与えないようにする」ことであった。この趣旨に基いて，極めて持続的で集中的な大運動が指導者のジョン・ブライトやリチャード・コブデンらの雄弁によって大衆の中にくりひろげられていった。この運動と共に外国と自由貿易を行なえば，国際分業の利益を受けて，各国の物価が安くなり，大衆の物質的幸福を増進し，国家の繁栄と力，又平和をもたらすという考えが人々の中に浸透していった。この自由貿易主義の考えは中産階級と広く労働者階級からも支持を得，ヴィクトリア朝のイギリスの，さまざまなイデオロギーの基盤はより安いパンと，より高い利益を求める闘いとによって築かれたのである。1840年にローランド・ヒル卿は１ペニー郵便制を採用した。これは手紙も小包も英国全島にわたっ

て1ペニーで配達するというものであって，この制度のお蔭で全国津々浦々にまで反穀物法同盟のプロパガンダは浸透していった。

1841年に1834年から1835年に続いて二度目の政権に帰り咲いたトーリー党の Sir Robert Peel（1788～1850）はこの反穀物法同盟の運動を看過することが当然不可能な時期に，ウイッグ党のメルバーン内閣から政権を引き継いだのである。彼は先ず，1840年の輸入関税調査特別委員会の調査によって明らかにされた既存の関税制度が外国貿易を制限し，工業の回復を妨げているという事実に基いて，1842年の予算案で750品目の関税を引き下げた。更に三年後には，520品目の関税が廃止された。しかしながらピールは穀物法を維持することが，イギリスの食料品自給に必要であると信じ，当初は完全な穀物法の撤廃は考えておらず，順応率（スライディング・スケール）の多少の修正により徐々に自由貿易運動を推進しようとしたのである。1845年3月には穀物法に対する議論は白熱し，ディズレーリは毎晩のように議会で首相ピールに対して攻撃演説をぶったということである。7月には長雨によってイギリスの小麦は大凶作となり，アイルランドと南部イギリスのじゃがいもは胴枯病によって壊滅状態となり，イギリスは飢饉という深刻な事態に直面することとなった。穀物法撤廃に関して，ピール内閣は意見が一致しなかったために，一時ピールは辞意を表明したのであるが，ウイッグ党が組閣に失敗したので，ピールは再び政権に復帰し，11月31日に穀物と食料品輸入のために開港することを内閣に提案。さしもの穀物法もここにようやく撤廃されることになる。Browning が "The Englishman in Italy" の最終部分を書いたのは多分1845年の9月であったであろうと推測されているが，この頃イギリスの社会状況は最悪であった。この時期に国民の最大の関心事であった穀物法の問題を詩人はどのようにこの詩の中で取り扱っているのか，次に具体的に見て行きたい。

Ⅲ

この詩は「フォルチュ，フォルチュ，かわいいお前，私の隣にお坐り，この膝（ひざ）の上に，小さな両脚をのばして！」という書き出しで始まっている。Fortù というのは Fortunata（フォルチュナータ）という娘の略称であろう。134行目にはこの子供の兄に道案内を頼んだことが語られており，すこし前の110行あたりにはまだ絞りたてのものであろうか，栓にブドウの葉がつめてある薄い緑色のガラスの瓶から，アルコールの度の弱いワインをすすってごらんと勧められているところや，今しも南西の強風 Sirocco（シロッコ）が吹き始め，空模様が怪しくなり，降り始めた雨の中で大人たちが忙しく立ち働いているのに嵐が怖くて怯えているところなどから判断すれば，この子供はまだ年端もいかぬ少女であろう。Sirocco というのはイタリアの東南，アフリカの北部からシシリー島，イタリア，スペインにかけて地中海地方を吹き荒れる水気の多い，息苦しくなるような熱い嵐のことで，この嵐が吹けば，Browning によると，ねじれたオリーヴの老木は激しく揺さぶられ，まだ半分も熟していないのにオリーヴの実はヒューヒューと音を立てて吹き飛ばされ，道に重なって落ちてしまう。脆い無花果（いちじく）の大木も，実をつけたままポキッと折れてしまうほどである。嵐が怖くてロザリオの鎖をまさぐりながら祈りを唱えているフォルチュに，この詩の主人公はソレントの平野を旅した時のさまざまな思い出を語って，楽しませてやろうとする。

雨が来るまでは長くて暑い乾いた秋であった。葡萄の房の一つ一つの白い皮には茶色の網目が入り，鶉（うずら）のとさかのような模様になっている。真っ赤に熟した石榴（ざくろ）の実は木の上で半分に裂けて割れている。大きな燧石の，ぐらぐらした壁の間から，通りの深い塵の中から，或は岩肌からい

たる所伸び放題に図太い越冬性のけいらん草の，日焼けした小枝が黄色い花を上に向けている。このあたりの詩人の筆致は色彩感覚に溢れ，感覚的であり，又詩人の観察力の鋭さを示している。

この詩の主人公が旅の途中で泊った先は恐らくみすぼらしい田舎の宿であったのかも知れない。雨戸は大枝と石とでしっかりと作られ，唯一の格子といえば，からみついて枯れている葡萄の小枝であった。彼は今朝，床から出る前に，どのような変化がおころうとしているのか思い浮かべたが，それというのも鶏用のかすみ網がすばやくカサカサと下される音で目が覚めたからであった。格子の隙間から外を見ると，網の支柱の所で留金の輪がするどくチャリンと鳴り，下で忙しくここの司祭とその兄弟が網をたぐり寄せているが，上を向いて働いている彼らの口の中まで雨が入り込んでいる。全ての平らな屋根の上には二つに割った無花果の実が干してあったが，娘達はその籠を軒の下に取り込んだ。今日は小舟を出し，漁に出かけようとするのは全く不必要なことに見えた。それも崖の下では激しく黒い波が，暗礁の上で泡立っていたからだった。昼頃，アマルフィの町から小船(スキフ)が到着する様子もなかった。いつもなら漁師が着いて，籠を目の前に投げ出す。するとここの海の幸がすべてまだ生きてぴくぴくと身を震るわせている。ピンクや灰色をしたゼリー状のもの，例えば水母(くらげ)，雲丹(うに)，鳥賊(いか)，それに海鼠(なまこ)の類(たぐい)であろうか。そういうものも入っている。奇妙な固りに触れるとパックリと口を開(ひら)け，眼は開き，みな角(つの)を出したり，瘤(こぶ)だらけになる。それを漁師はにこりともせずにただ見ているだけだが，その男のまわりにはまるで小蝦(えび)のような裸で茶色の子供達が，小鬼(インプ)のように叫び声をあげてまとわりついている。漁師自身も上半身は裸だ。彼の首の周囲には真鍮のコインが紐でぶら下げられているが，これは遭難除けのお守りだ。しかし，今日は一隻の漁船もサレルノの町に着かなかったので，友人達が一人残らず戻ってきて，彼らも手伝って葡萄園で葡萄の収獲(とりいれ)が始まったのであった。

家の半分ほどの高さがある大きな桶(おけ)の中でフォルチュの兄もすっかり裸足(はだし)になって踏みつぶしている。葡萄ジュースはまるで血のように迸り出てくる。なんとかして葡萄を足の下に押え込もうとしている間に息が切れ，疲れてきて歯もむき出しになるが，やっとうまく片を付けると，肩に籠を乗せてたえず行き来する娘達から新手の分捕品が注ぎ込まれる。篠つく雨に眼は閉じている。娘といってもこの娘は年上の者達である。年下の者達はアロエの生垣の下や，果樹園の黒土を苗床にして，汁気も多く真っ赤にトマトが生(な)っている所で跪いて，この最初の秋雨に誘われ這い出してきた蝸牛(かたつむり)を前掛けに集めている。イタリアの人々にとってはこれは大好きな御馳走であるが，この詩の主人公のイギリス人にとっては大の苦手なものである。葡萄摘みの人々には紐のようにツルツルと呑みこみたくなるようなマカロニやフライにしたひょうたんのような瓜の，紫色の大きな薄切りがほかに添えて出されるのである。

ここで主人公は先程フォルチュに人々が持ってきてくれた葡萄の房を勧める。まだ雨水が一つ一つの粒の実についている濃い青色の粉(こな)の上を，すべり落ちている水々しくて美しい葡萄である。その一粒を食べようと思って彼女が口へ持っていくのを，一匹の蜂がじれてしつこく，なおも追いすがって唇の所まで飛んでくる。更に主人公のイギリス人は彼女に色々な物を食べるように勧める。つるつるとして白く，まるで玉葱のように一枚一枚が薄くはげる凝乳白色のチーズの球の半分，弱いワイン，仕上げはウチワサボテンの赤い果実。このジュースをすすると真珠のような彼女の歯に黒い堅い種が残る。このイギリス人の話を聞いている間に，フォルチュは眠くなったのであろう。嵐は荒れ出して来たが，彼女がこれらの物で満腹して眠たくなったのであればそれにこしたことはない。しかし，すっかり嵐になっているのにも拘らず，自分の家に帰りかけようとする彼女に，彼は他に嵐を避ける場所はないから再び彼の傍に寄り，肩によりかかって彼の

話を聴くか，寝るかにしなさいと彼女をなだめるのであった。

ここで彼は葡萄の収獲も終り，嵐も去って，葡萄の枝から葉がすべて剝ぎ取られ，来週あたり騾馬や雌牛の餌になってしまう頃のことを想像する。その時にはこの国はどのように見えることであろうか。昨夜，彼は山々を騾馬で登った。フォルチュの兄が案内人（ガイド）であった。すぐにこの兄はイギリス人を置き去りにして，道の両側に生っていた黒くて丸く，甘い銀梅花の実で腹を満たしたり，ななかまどの木から宝石のような，バラ色のすばらしい毛羽（けば）立ったきらきら光る丸い実をもいだりした。しかし，イギリス人の騾馬はたしかな，落着いた道を選んだ。ただちょっと佇んでいなないたが，それは仲間の騾馬が薪の束と水樽を積んで，下の谷間を通る姿が見えたからである。 まもなく平原から抜け出した。 次第に険しくなって行く山道を登っていくと，やがて森も消え，あたりは岩の裂け目，ぐらぐらした瓦礫の山が行く手を阻んでいる。これらは下の大海から這い上ってきて，そこで死んだ怪物のぐらぐらに折れた歯のようであった。更に，周囲の景色は山道にへばりついた銀灰色のカラクサケマン草や，風の怒りにも拘らず，海に面した塩岩の表面に好んで生えるローズマリーに不承不承（ふしょうぶしょう）場所を明け渡していた。このローズマリーはいつも黒く，枯れかけているように見える。又そこで根を生やし，実をつける石に対して誠実な乳香樹や，枝が珊瑚（さんご）色で，透き通ったように明るく，まるで丸い葉飾りのように，淡い緑の海のような色の葉がついた木にも場所を明け渡していた。イギリス人の騾馬はそれらすべての物の上を，麦束の上をまたぐ落穂拾いの用心深さで踏んで行った。更に一歩一歩女性のように，やがてぐるぐると曲って，カルヴァノ山の頂上へと登って行った。すると頭上には深遠なる神の奥津城，周囲は山また山。下には海。内には悠久の過去と悠久の未来を証明する心がある。天はおそるべきほど透明で，青き幽深の境に生かされている生から目を遮ぎる城壁もない。山々とその無限の起伏！いつも人とともに動いている。余りにも深い畏敬の念に満たされたイギリス人には山々に頭と胸があり，それがこの幽寂の境を乱すものは誰かを知ろうと姿を現わし，急に振りかえればそれが見え，隠れないうちにそれを見つけられるような気がする。彼にとって山々は，自分が眺め，身をのり出し，愛し（実は愛している振りをしているのだが）柔い平野がどのように山の麓に縮こまり，海松は平たくうずくまり，野生の果樹は曲り，銀梅花の葉でさえもねじれ，縮れ，閉じている有様を彼に知られるのを嫌がっているように見える。しかし，すべては押し黙り，重苦しい。この美しさは人の感情をかき立てるが，活気のある美しさではない。美しいことは美しいが，山々の奴隷である。

そこで彼は海へと眼を向けた。そこにはあのギリシヤ神話のサイレンの島々，この国のガリ群島がいつも変らぬ緑色で眠っていた。いかなる時代もこの三つの島を隔てることはできないし，一つだけ離れた妹島を群に加えることもできない。この島は追い付こうとする途中でユリシーズを見たのである。今日も波と位置は変っていない。小さい島ではあるけど，まさに波の中に入り，胸まで深く，静かに岩の蔭から，大胆な姉がすでになかばまで泳ぎついたのを見つめている。彼はいつかフォルチュとそこへ船で行き，四方から全く新しい岩が顔を出している姿や，サイレンが住む新しい住みかを見てみようと，彼女を誘っている。彼は島々の周囲をぐるぐると回り，目には見えないが，灰色のガラスのような水を波立たせて，きらきらと輝く緑色に変えている暗礁の真上を通ってみたいと思う。次に岩伝いに陸にたどり着き，一番大きな島で，入口がなく，ただ身のこなしの速い蜥蜴（とかげ）が出入りする隙間（すきま）のあいた奇妙な四角い真っ黒な小塔も探索してみたい。次にそこに立って聞いてみたいのは鳥の静かな鳴き声，人生とは何かをはっきりと教えてくれる声だ。かつて鳥達はユリシーズに秘密を歌った。その時，彼が聞き悟ったのは今このイギリス人が聞

き悟った現世の秘密である。

見ると，太陽がカルヴァノ山の上に顔を出した。太陽は大きな黒雲に突き当り，縹渺たる金色のもやに包まれた山の頂の上で，それを揺り動かしている。嵐は終った。外を見ると鋳掛屋で鍛治屋のジプシーがやってきて，鞴と炉を据えつけ，壁の蔭にうずくまり，すぐにトンテン，カンテンと仕事にとりかかる。片方の眼で彼の口琴を鳴らしてみたくてうずうずしている腕白小僧達を遠ざけ，もう片方の眼は針金のように巻いた巻毛の下から，つやつやと色艶のいい豚が，風に落ちた果物の分け前にありつこうと近付いてくるのをじっと見つめている。そのピンクの色は僧院長の頬と同じである。風はすっかり止んだ。このイギリス人の問わず語りの話にフォルチュはうとうとと眠ってしまったのであろう。彼は彼女を起こし，一緒に出かけ，今夜聖餐式の飾りにと整えられた素敵な品物が飾られるのを見ようと促している。明日はとりわけ立派な「ロザリオの聖母」祭である。ドミニコ派の僧がこの三週間暗誦し続けてきた説教が（すべて自然に，何の技巧もなく）即座に聞ける。柱といわず，支柱といわず赤や青の紙で飾られないところはない。すべての屋根にはリボンがひらひらと動いている。どの祭壇にもロウソクが燃えている。しかし大傑作は急拵えの立派な舞台で，ベルリーニやアウベルなどに気後れしないバイオリン弾き，笛吹き，それに太鼓叩き達をそこにのせるためのもの。彼らは神父の声がかすれた時，祭りの第二の出し物として何か活発な音楽を演奏するのだ。次に亜麻色のかつらをつけた聖母マリア像が平野を通って華やかに運ばれてくる。一方，僧達は派手な行列に加わってしずしずと歩くつもりでいる。喜々とした教会の周囲に火薬がつめられた古い瓶がおかれている。マリア像が再び入ってくると細心の用意を払ってポンポンと破裂させられる。夜，カルヴァノ山の頂上からは大きなかがり火がつり下げられ，平野ではトランペットがコーラスに加わり，さらにもっとパンパンと破裂する爆竹。フォルチュと祭りを楽しもうとこのイギリス人は兎に角庭へ，壁の所まで彼女を連れ出そうと誘っている。壁の所で漆喰を鍬で叩くと，怒って蠍が鋏を拡げて落ちてくる。しかし，フォルチュにとってそれらは余り面白くないことである。すこし大人びて「そんなの，つまらないわ！」と彼女は言った。それがつまらないというのであれば，彼の国イギリスでは人々は今日も重々しく会って話し合うのだが，もしも穀物法の撤廃が正しくて賢明なことであれば，もしもそれがふさわしいことであれば，熱風の嵐シロッコは黒雲に乗って空から消え去るであろう，と彼は言ってこの詩は終るのである。

Ⅳ

1845年にBrowningがこの詩をまだ原稿の状態でElizabeth Barrettに送った時，そのタイトルは"England in Italy. Autumn at Sorrento."であった。しかしながら，それが印刷に回され，出版された時は，その副題が「ソレントの秋」から「ソレント平野」（*Piano di Sorrento*）に変えられている。次にタイトルが変ったのは1849年で，その時に現在の"The Englishman in Italy. *Piano di Sorrento.*"に定着したのである。当初の意図では恐らく美しいソレントの秋の景色を強調したかったのであろう。「イタリアの中のイギリス」という主題では二つの国を重ねて，イタリアの国の中にあるイギリス的な要素を描こうとしたのではないかと想像されるが，秋という季節にしても，ソレントの秋の中には余りイギリス的な要素はない。例えば，ワインの生産国ではない国から来た者にとっては，大きな桶の中で素足になって人々が大量の葡萄を踏みつけて潰し，葡萄ジュースを作る様子などは大いに興味をそそられる情景であったに違いない。画家としての

素質にも恵まれていたBrowningは色彩も鮮かにそれを描写しているが，それは郷愁を感じさせるものというよりは，寧ろ異国情緒を大いに喚起するものである。従って，当初の題名では漠然としていて，詩人が何を意図したのか定かではない。"Autumn at Sorrento"から"*Piano di Sorrento*"への変更は季節から場所へ強調点が移っているため，多少はイギリス的な特徴が探せなくはないが，これとてもイタリックでイタリア語にしてあるのだから，寧ろ，異国情緒的な要素が強く表面に押し出されてくる。第三章で紹介したように，この詩の内容は一人のイギリス人がフォルチュという少女に問わず語りに語っている紀行詩ともいうべきものである。ソレント平野観光の旅の中でBrowning自身が体験した出来事が，又彼自身が見聞した事実が鋭い観察力で詳細に描かれている所から判断して，1849年に定着した"The Englishman in Italy. *Piano di Sorrento.*"はこの詩にもっとも適した題名である。前述した葡萄酒(ワイン)作りの情景の他に，ソレントの海岸で，イギリス人が普通，食用に供しないような軟体動物をイタリアの漁師が捕ってきたシーン，又若い娘達が食用に，雨に誘われて這い出してきた蝸牛(かたつむり)を前掛けに集めている姿などは，そのグロテスクさの故に，詩人Browningが強く印象付けられたものであろう。しかめ面(つら)をして眺めている彼の姿が読者の目にありありと見えるようである。しかしながら全体としての雰囲気は牧歌的であるが，今は決して平和ではない。熟した葡萄や真っ赤に熟れて半分に割れている柘榴，平たい屋根の上に（半分に割って）干してある無花果の実，やわらかに汁気も多く赤く熟したトマト，枝もたわわに生っているオリーヴの実，それらに象徴されるのどかで豊かな田舎に，熱風の嵐シロッコが吹き荒れているからだ。もとはと言えば，この詩の主人公は嵐が怖くて怯えている少女に自分の思い出話を聞かせて，嵐に向けられている彼女の心をはぐらかせてやろうとしているのである。

この嵐は激しく，オリーヴの実もピューピューと風に吹かれ，音を立てて路上に落ちてくる。ねじれたオリーヴの老木も大揺れに揺れている。もろい無花果の大木などは実もろともにぽっきりと折れてしまう程である。この嵐は当時政治的にはオーストリアに抑圧されていたイタリアの状況を象徴しているのかも知れない。これは一つの厳しい現実である。このオーストリアの圧政の下に呻吟するイタリアの姿はカルヴァノ山の麓に柔いソレントの平野が縮こまり，海松が低くうずくまり，銀梅花の葉もねじれ，縮れ，閉じている姿に喩えられている。すべては重苦しく，押しだまっている。その感覚的な美しさは，又内気な美しさでもある。主人公はそれを"How fair! but a slave."「何と美しいことか！だけど奴隷だ。」と表現している。

しかしながら，この激しい嵐も一時的なものであり，やがて収まり，カルヴァノ山の上に陽が射してくる。その山の上からは遥か下に，かってのギリシャ神話のサイレンの島々，今日のイタリアのガリ群島が見える。ギリシャ神話によると，オデュセウス（ラテン語名でユリシーズ）はライストリュゴネス人という野蛮な一族に襲われ，逃げ延びてついに太陽の娘のキルケが住むアイアイアという島へたどり着いたのである。実はこのキルケは魔法使いの女で，オデュセウスの部下に酒を振る舞い，酔わせておいて後，杖で触れて一人残らず豚に変えてしまったのである。そこでオデュセウスはヘルメスの知恵を借りてキルケに近付き，彼女の魔法を破って部下を全部元の姿に立ち返らせ，その後彼女の手厚い歓待を受け，遂にはオデュセウスは故郷のことなどは忘れてしまい，安楽と快楽との無為の生活におぼれてしまったように思われたのである。William E. Harrold教授はその著*The Variance and the Unity*の71頁から72頁にかけて次のように述べている。

Browning invites the reader associate the Englishman with Ulysses, who is so well enter-

tained in this Italian paradise that he has momentarily forgotten his homeland. He has settled sedately in the lush surroundings where even toil seems to him ease and comfort, and the beauty is a temporary refuge from his own problems.

（ブラウニングは読者にこのイギリス人からユリシーズを連想するようにと求めている。彼はこのイタリアの楽園で大いに歓待された挙句，一時的に自分の故郷のことなど忘れてしまったのだ。彼は緑豊かな環境の中に静かに腰を据えてしまったが，そこでは苦労も彼にとって安らぎであり慰めに見える。そして美は彼自身の問題からの，仮の隠れがである。）

Harrold 教授がこのイギリス人とイタリアとの関係を，オデュセウス（ユリシーズ）とキルケとの関係において説明しようとしているのは，この詩の主題から判断すると多少無理であろう。寧ろ，この時代のイタリアをオデュセウスとセイレン（サイレン）との関係で説明する方がより自然ではなかろうか。

セイレンは半人半鳥の海の精（ニンフ）で，その美しい歌声には人を魅了する力があったので，船人達がその歌声を聞くと海に飛び込んで死んだといわれている。そこでオデュセウスは先のキルケの忠告に従って，セイレンの島を通り抜けるまでは，水夫達の耳には歌が聞こえないように耳に蠟をつめさせ，自分自身の体は帆柱に綱で縛りつけさせ，どんなことがあっても決して解かないようにさせたのであった。船がセイレンの島に近付くと，穏やかな海の上をニンフたちの歌声が聞こえて来た。その美しい調べに魅せられて，オデュセウスは身悶えして抜け出そうと試みたり，叫んだり，ため息をついたりして，水夫たちに綱を解くように命じるのであるが，彼らは命令を守り，厳重に縛ったままであった。船はさらに進み，歌声はやがてかすかになり，遂には聞こえなくなった。その時，オデュセウスは大喜びでみんなに耳の蠟の栓を取れと合図をしたので人々は自由になったというのである。

Harrold 教授が，主人公のイギリス人がフォルチュを誘って，サイレンの新しい棲み家である新しい岩場に行ってみようと言っているのは，かのオデュセウスのセイレンが今も歌う安らぎと美の歌にこのイギリス人が魅せられているからだとする説明はなかなか洞察力に富む説明であるが，主題から飛躍している。帆柱に縛られて悶（もだ）え苦しむオデュセウスにもやがて時が進めば，セイレンの魔力から解放され，自由がやって来る。オーストリアの圧政の下に奴隷の状態にされているイタリアにも，やがて時が至れば自由がやって来るのである。しかしながら事実はイタリアの各諸国で1840年代の初めから革命的な蜂起があったが成功せず，弾圧を受けた。1848年３月12日にはサルデーニヤ王カルロ・アルベルトはオーストリアから全イタリアの奪還を宣言し，軍隊を進めたのであるが，６月下旬には戦いに破れ休戦条約を結び，1849年３月，オーストリアとの休戦条約が切れると，カルロ・アルベルトはふたたび交戦を決意し，反撃したにも拘らず，手痛い敗北を受け，イタリアでは独立への全ての望みが断ち切られることになる。イタリアにとってこの時代がいかに厳しいものであっても，この主人公は人々の生活の中に，希望を見出しており，さらにその希望はロザリオの聖母マリア祭へと続いて行く。

嵐はすっかりおさまった。主人公がフォルチュに見に行こうと言っているのは明日の聖母祭の準備である。ロザリオの聖母祭というのは1571年10月７日に，法王 Pius 五世の下に集ったヨーロッパのカトリック教国が連合艦隊を作り，トルコの艦隊をギリシヤのパトラス湾に臨むレパント港での会戦で撃破したことを記念して行われるお祭りである。戦後 Pius 五世はこの日を勝利の聖母祭と定め，さらに1583年４月１日に Gregory 十三世はその教書で「ロザリオの聖母マリア祭」と名付け，あらゆるカトリック教会でこの勝利を記念して毎年祝われることになったのであ

る。キリストと聖母マリアの受難を思いながら，ロザリオをまさぐり，祈る祈りが勝利をもたらしたと信じられているが，共通のクリスチャンの祈りが結束をもたらし，勝利をもたらしたと信じることは当然のことであろう。明日が偶然にこの祭日であるということは，イタリアのオーストリアに対する勝利と自由を願うこのイギリス人にとっては，大いに意義のあることであった。

しかしながら，これらの話はすべてフォルチュにとっては「つまらない話」であったのである。年端もいかない少女と，経験もあり，哲学的な思考力を持ったこのイギリス人との間の年齢のギャップはいかんともしがたい。

彼女の言葉は皮肉にも，彼にもう一つの厳しい現実を思い出させた。この詩が最初のタイトルであった "England in Italy" という意味で意義があるのは，まさにこの点においてである。イタリアの地に吹き荒れるオーストリアの圧政というシロッコは，イギリス人である主人公にとって，イギリスに吹きあれる穀物法というシロッコであったのである。しかしながら，この嵐は全く同じ物ではない。

イタリアの嵐は全く政治的なものであり，たとえそれが吹き荒れてもこの国は美しく，豊かに作物は熟し，人々は労働にいそしんでいる。他方，イギリスの嵐は社会的，経済的であり，その連想は長雨，じゃがいもの腐敗，飢饉，飢えに苦しむ汚れた顔や手足の，都会の工場労働者達である。そこには革命のにおいさえする。穀物法の廃止は正しいことであり，賢明なことであり，又当然のことであった。それはやがて嵐が黒雲にのって空から消えさることと同じなのである。

最後に一言つけ加えれば，この詩の主人公であるイギリス人の希望は，そのまま Browning 自身の希望でもあったであろう。詩劇の作者としてスタートした彼の作品が殆ど人々の人気を得ることが出来ず，失敗作におわったことは彼自身の人生にとって厳しい現実，すなわち嵐であった。イギリス人が島に立って小鳥たちの静かな歌声，我々に人生とは何かはっきりと教えてくれる声を聞きたいと思ったその人生の秘密とは Browning にとって何であったのであろうか。もしかしてそれは希望であったのかもしれない。このイギリス人にとって，嵐との出会い，又その嵐が過ぎ去るまでフォルチュに思い出を語りながら過ごしたひと時は，彼の魂の発展途上における大きな一つの出来事であったであろう。Browning 自身にとっても，この詩の題材を得たイタリア旅行は，彼の詩人としての成長過程における大きな出来事の一つであったのである。この詩が収められた詩集 *Dramatic Romances and Lyrics* には初めて Browning 独自の詩人としての輝きが，あたかもカルヴァノ山の頂から厚い黒雲を破って陽の光が射したように輝き始めたのである。その意味において，この詩は重要な詩であると言えよう。

Selected Bibliography

Ashworth, William. *An Economic History of England, 1870–1939.* London: Methuen & Co. Ltd., 1972.

Berdoe, Edward. *The Browning Cyclopaedia.* London: Geroge Allen and Unwin Ltd., 1964.

DeVane, W. Clyde. *A Browning Handbook*, 2nd ed. New York: Appleton–Century–Crofts, 1955.

Drew, Philip. *The Poetry of Browning, A Critical Introduction.* London: Methuen & Co. Ltd., 1970.

Gridley, E. Roy. *Browning.* London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1972.

Irvine, William & Park, Honan. *The Book, the Ring and the Poet.* New York, McGraw–Hill Book Company. 1974.

Thomas, Donald. *Robert Browning, A Life Within Life.* London: Weidenfield and Nicolson, 1982.

Thomson, David. *England in the Nineteenth Century, 1815–1914.* Penguin Books. 1978.